（雪の中学入試 2017 1/14）

2017.3
vol.204

いのちの記憶

学校長　飯山　等

私の父は9年前2008年の8月、「戦争はあかん」を最後の言葉とし、84歳で亡くなりました。癌の痛みを緩和するために処方されていたモルヒネの影響で、意思を持った会話をすることはまったくできない混濁した意識でもう一月ほどの時間を過ごしてきていました。その父が厚く重なった混濁の層を突き破って最後に発した、人としての声でした。あの暑い昭和20年の8月を身体で感じながらの叫びだったのでしょう。傍で看てくれていた妻からそのことを知らされたとき、熱いものがこみ上げてくるのと同時に、日頃は感じることのなかった父の深層に触れた思いでした。先の大戦の終結を、特攻の基地のあった鹿児島知覧の地で迎えた父の、その後の人生においてつねに突き上げ、発し続けられていた心の声、戦争を語ることのそれほど多くなかった父の中で、決して消え薄れていくことなく、どこまでも現在形の痛みであり続けた深い思いであったのだと、あらためて知らされました。

父の母すなわち私の祖母は1988年12月に90歳で亡くなりました。晩年までたいへん元気で、朝散歩に出かけ喫茶店でモーニングを楽しむのが習慣のおしゃれな人でした。身体が強かったとともに精神的にも気丈なひとで、私の印象でもこわいくらいの人でした。10月の初めに風邪をこじらせて以来危ない状態が続き、いよいよ危篤ということで叔母たちが交代で付き添って寝ていたのですが、亡くなる3日前の晩、祖母が「ねんねんころりよ、おころりよ」と静かな声で子守歌を歌い出した。私は叔母からその話を聞いたとき、言いようのない感動で胸がいっぱいになりました。それは、確かに横に寝ている我が子・叔母のために歌われたのでした。想像をたくましく考えることを許してもらえば、叔母が寝返りでもしたのでしょう、寝付けない我が子の気配を感じ取り、安らかな眠りをもたらすために歌われた。もうすっかり意識は遠く薄くなってきていた中にあって、我が子を案ずる心は脈々と息づいていたのです。自分のために歌われる子守歌を聴いた記憶のある人はおそらくいないでしょう。自分という意識が生じる頃には、もう自分のために歌われる母の子守歌は聞こえません。叔母は60歳を過ぎて、自分のために歌われる子守歌を、まさにその母の生命が終わらんとするとき、遺言のように聞くことができたのでした。

昨年11月に大谷の講堂でお勤めした報恩講において、併せてお勤めしているご縁の方々の追弔会に、20年前に大谷高校2年4月在学の若さで亡くなった床尾学君のお母さんがお参りされました。亡くなられた当初は1年に一度この日大谷に来て、学君を存知している教員と話をすることが、年を経てからは一年に一度やって来る本校からの追弔会の案内が、我が子のことを忘れずにいてくれる人が確かにいると、どれほど励まされ、救われたかと、感謝の情いを述べられました。《大谷》が、1枚のはがきがこんなにも深く胸に抱きしめられていたことに、私は身がふるえました。

この大谷という時と場は、いま我々に自身の意識の届かない深みにおいて、どのように経験され、記憶されているのであろうか。

大谷中・高等学校　京都市東山区今熊野池田町12　TEL：(075)541-1312　http://www.otani.ed.jp　編集兼発行責任 宗教人権教育部 乾 文雄